

2015年6月14日第二主日花の日礼拝

説教「野のゆりを見よ」

マタイの福音書6章25-34節

【ガリラヤの山上で】

今日の聖書の個所は、主イエスの山上の説教の一部。主イエスがガリラヤの自然の中で語られた、主イエスを信じる人々の生き方。それが山上の説教です。今日も主イエスは私たちに直接語りかけてくださっています。その主イエスのことばを聞き取りましょう。

【心配するな】

「そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい」(31)とおっしゃる主イエス。主は何度も心配するなと繰り返されました(25、34)。心配しなくてもよい理由は、神さまがよくしてくださるからです(30)。

けれども、「心配するのはやめなさい」(31)は、かなり強い禁止のことばです。主イエスは心配することを禁じておられるのです。なぜ、心配しては、ならないのか。それは、神さまとの交わりの喜びが損ねられるからです。

「いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。」(25)とある「いのち」は、私たちがあと何年生きる、生存する、という意味の「いのち」ではありません。ここでの「いのち」は、「たましい」と訳すことができることば。その人の

全存在をあらわします。

私たちの存在とは何か。それは、愛し合う存在です。私たちは、愛のために作られました。それにもかかわらず神さまから離れてしまった私たち。そんな私たちを主イエスは、放っておかれませんでした。言葉だけではなく、十字架にかかって死んでくださったのです。私たちのうちに、神のかたちを回復するための十字架。そんなにしてまで回復された神さまとの交わりの喜びを、損ねてはなりません。明日のことを心配して、今神さまを喜ぶことを損ねてはならないのです。

【ナウエン】

ヘンリー・ナウエンは、神さまと生きる喜びを追い求めた人ですが、「世俗社会に生きる友のために」という副題の本を残しています。どのようにしたら、競争社会の中で神さまとの交わりを喜ぶことができるかが書かれています。それは神さまの声を聞き続けること。神さまの愛の声を聞き続けることです。

ナウエンは、神さまの声を聞こえなくする、大きなワナがあると云います。それは「自分なんてダメだ」という自分の声だということです。私たちはこの声にゆさぶられます。そしてときに、成功して見せることや自分の言い分を通すことが、その声を押しのける方法だと考えます。これは、明日を思いわずらう生活の始まりです。

けれども、私たちはそんな声に耳を貸しては

なりません。「わたしはあなたを愛している。そのままのあなたを愛して受け入れている。」という神さまのみ声を忘れてはならないのです。そのために聖書があります。礼拝があります。さらに、もうひとつの助け手であるおたがいがあります。私たちは兄弟姉妹を通して「あなたはだめなんかじゃない」「自分を責めるような自分の声を信じてはいけない」という声を聴くことができます。そして支え合いながら、今日をともに生きるのです。

【まず第一に】

主イエスはそんな私たちを励まして、「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。」(33)とおっしゃいます。神の国とは神さまの恵みの支配。神の義とは、神さまが罪人である私たちを赦して、神の子としてくださったその義。神の国と神の義を求めるとは、すでに始まっている神さまの支配、すでに与えられている救いの恵みを信頼することです。私たちは、大きな神さまを大きく信頼します。それが神の国と神の義とをまず第一にすることです。その中で神さまを喜び続けるのです。

キリスト教信仰とは、神さまと交わる喜びに入れられることです。そんなすばらしいいのちにすでにあずかっている私たちです。野のゆりよりも、はるかにすばらしいおたがいを感謝しましょう。そのように私たちをしてくださっている神さまをほめたたえましょう。